

# 第七章

受け継がれるみ教え



## 第七章 受け継がれるみ教え

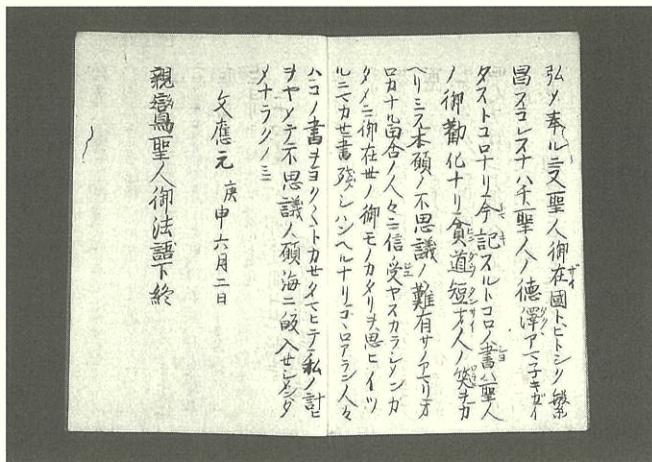
西宗寺の門徒は、代々の人々のほかに、分家したり、近年の都市化に伴い、松江近在に転入して来た人々が新たに加わり、年々増加している。従来は農業従事者がほとんどであったが、職業構成が多様化し、範囲も市内一円に広がっている。その中には、浄土真宗の教えを求めて他宗から移ってきた人もいる。寺としても、新しい住宅団地を対象に案内のパンフレットを配布し、それが機縁となつて門徒に加わった人も多い。未信、不信の人々に対しても、更なるご縁を広げてゆくことが寺の重要な役割であろう。

永年にわたつて培われたお念佛の心が、しっかりと伝えられている例が東持田町納藏地区である。この地域の家々には、出雲地方においては珍しいことであるが、神棚がない。井上修身氏宅のお仏壇には、十数冊の書き写されたお聖教が納められている。文明三年（一四七二）のものが最も古く、「親鸞聖人伝絵」「正信念仏偈」「安心いろは歌」など、当時、地方では入手が困難であったと思われる書物の写しが多数残っている。いずれも「必ず助けるという如來の本願を信じて疑わず」という、浄土真宗の信心を中心とした日暮しがしのばれるものである。この地域には、かつて「書き写し講」とでも呼ぶ会が毎月開かれ、銘々お経や法語を喜び、味わいながら書き写していたそうだ。村の入口に有縁堂を建立し、阿弥陀如來を安置して、江戸期以来、地区住民（西宗寺門徒以外も含む）で守り続けてきた。晚秋には、家順で報恩講をお勤めするが、この折持読する「ご文章」も、書き写された一冊が大切に受け継がれている。先人の信心の

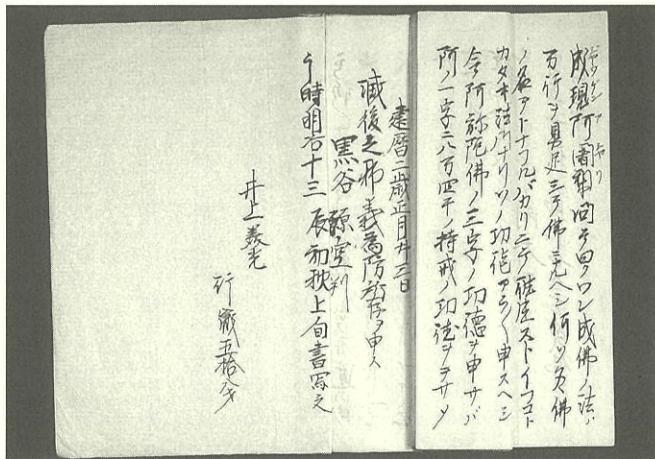
あり様に頭の下がるばかりである。

更に昨今、毎月お参りに来て欲しいとの依頼も出てきた。

関西や九州一円ではごく一般的なことで、月



親鸞聖人御法話写し（井上修身氏宅蔵）



御法話写し（井上修身氏宅蔵）

忌参りといわれている。亡くなつた家族の月命日、あるいは第一日曜日などの日を決めて、毎月家族そろつてお仏壇に手を合わすことを習慣にされている。幼児期からこうした仏参の宗教的な雰囲気を身近なものとして感じ、「仏さまが見てござる、聞いてござる、知つてござる」と、自分を常に見守つてくれる大きなものの存在を認識するところに、人間としての資質が培われてゆくのであろう。社会の価値観がどんどん変化していく今日、自分一人が正しいと思いがちであるが、およそ人間ほどあてにならない心の者はいない。うれしい時もなんまんだぶつ、悲しい時もなんまんだぶつ、安心して任せきつて生きてゆける世界を子や孫に伝えてゆきたいものである。

帰敬式(ききょうしき)についても述べておきたい。法名を頂くのは亡くなつた時にお手次寺の住職からと思っているご門徒が多い。これはあくまで便宜上のことである。正式には「帰敬式」（お剃刀(かみそり)ともいう）を受けて、ご門主からお剃刀をあてて頂き、法名を授けられるのである。元気なうちにお釈迦さまの弟子となつて仏法を聞かせていただく身となる儀式であるので、法名には「釋○○」とつけられる。法要の折に本山へお参りして帰敬式を受けるご門徒も増えてきた。小学生や成人になつた機会に受式した若い世代もいる。やはり日常生活で手を合わす習慣がある家庭環境であつた。親から子へ、孫へと次第相承のお念仏が広がつていくことを願つて止まない。

お寺は敷居が高くて参りにくいと敬遠されがちであるが、小さな時から馴染(なじ)んだ場所であれば親しみが湧くのではないだろうか。また、仏事や仏さまのことは何も分からなくて恥ずかしい、どうしたらよいかと思つてゐる人たちのために、通信教育というすばらしい方法が用意されている。突然愛する者を失つて

はじめて仏法を聞く身になつた人もいる。系統だてて学びたい人、一般的な仏教入門から始まつて、浄土真宗の教えを深めて学びたい人のために、一年間と三年間の通信課程がある。スクーリングで出会つた法友と一生の友情を育むこともある。そういうご縁こそ大切な仏さまよりの賜り物であろう。

## ご案内

浄土真宗 本願寺派(西本願寺)

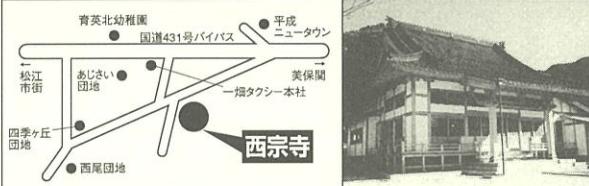
さい しゅう じ  
**西 宗 寺**

〒690-0821 松江市上東川津町845  
電話・FAX 0852-25-6643

### お寺の活動

- 常例法座 毎月16日 午後7時半~
  - 子供会 每月第4土曜日 午前10時~
  - 仏教婦人会
  - 仏教文化講演会
  - 報恩講
  - 仏事相談
- ） 日時は寺の掲示板を御覧下さい。

一緒に語りあいましょう。お気軽にどうぞ。



パンフレット

## 西宗寺年表

		西暦		西宗寺の沿革	本山ならびに社会の歩み
		年号			
一五八二	天正一〇	一五七八	一五七八	一一七三	承安三 親鸞聖人、京都日野の地に誕生する。
一五八〇	天正八	元	元	一一八一	養和元 親鸞聖人、慈円について得度する。
織田信長、本能寺の変でたおれる。	天正六	元亀	文永九	一一〇一	建仁元 親鸞聖人、源空の門に入つて専修念佛に帰する。
尼子氏滅ぶ。 ～寺基を移す。	尼子氏滅ぶ。	元	元享元	一一三四	元仁元 親鸞聖人、「教行信証」を著す。
織田信長、石山本願寺を攻め石山戦争始まる。	顯如上人、信長と講和し、紀州鷺森	一五七〇	一三三一 一二七一 一二六二 二二六一	弘長二 弘長二 弘長二 弘長二	親鸞聖人、往生する。 京都東山に大谷廟堂を建立する。 初めて「本願寺」と公称する。

一五六八三	天正一一	一月二二日 多賀氏、教育坊に寺地 (陽田道場) を寄進、第一世住職教 音、寺院を創立する。
一五六九一	天正一九	豊臣秀吉、京都に本願寺の土地を寄 進する。
一五六九二	慶長五	関ヶ原の戦い。
一五六九三	慶長八	徳川家康、教如に土地を寄進、東本 願寺成立する。
一五六九四	慶長一二	徳川家康、江戸に幕府を開く。祖廟 を西大谷へ移す。
一五六九五	元和元	堀尾吉晴、松江築城と町づくりに着手 する。
一五六九六	元和元	幕府、諸宗諸本山諸法度を定める。
一五六九七	元和元	第二世住職願正、本願寺より西宗寺 の寺号を下付さる。
一五六九八	寛永五	一二月二九日 木仏を本願寺より許 可さる。
一五六九九	寛永五	一二月二九日 木仏を本願寺より許 可さる。
一五六九〇	寛永五	一二月二九日 木仏を本願寺より許 可さる。

一七五七	宝曆 七	五月 本願寺より、湛如上人絵像を 許可される。（願主　品明）	一七二五	享保一〇	九月三〇日　住職妹　釈妙寿往生す る。	一七一六	享保 元	第三世住職隆哲、本願寺より、祖師、 七高僧、太子、良如上人絵像を許可 さる。	一六三〇	寛永 七	幕府、キリスト教関係の禁書を定め る。
一月二一日	坊守耕貞春（奥谷町真					一六七九	延宝 七	倉崎權兵衛、出雲焼（楽山焼）を開 窯する。	一六三八	寛永一五	松平直政、松江藩主となる。
			一七三一	享保一七	出雲・石見地方が大凶作となる。	一六三九	寛永一六	学寮（現龍谷大学）落成する。	一六四〇	寛永一七	幕府、寺請制度（檀家制度）、宗旨 人別帳制度（宗門改帳）を定める。

一七八八	天明八	一一月一四日	坊守	釈妙曜	(中原	光寺より入寺)	往生する。
一七八九	天明七	町正覺寺より入寺)	往生する。				
一七八三	天明三					大飢饉、奥羽より全国におよぶ。	
一七八七	天明七					各地で打ちこわしが起る。	
一七八二	寛政五	松江藩主松平治郷	(不味)	の指示に			
一七八一	天保二	幕府、	全国人口調査を実施する。				
一七八〇	天保一						
一七八五	安政二	二月二〇日	坊守	釈梅岳妙香	(石		
一七八六	文久二	橋町順光寺より入寺)	往生する。	(第六			
一七八七	文久四	四月一日	第六世住職	教瑞三六歳	六世住職教瑞の妻)		
一七八八	文久四	(宗門御改増減人別帳より)。					
一七八九	文久四	三月	松井天瑞	住職となる。			
一七八一	文久四	八月一五日	第七世住職	釈天瑞	(斐川町覺専寺より入寺)	往生する。	

一八六五	慶応元	行年二二歳。 六月三日 第六世住職 積教瑞（斐川町覚専寺より入寺）往生する。行年四六歳。
一八六六	慶応二	八月 松井淨信住職となる。 五月一六日 第八世住職 積淨信（斐川町覚専寺より入寺）往生する。 行年一八歳。
一八八〇	明治一三	一二月一三日坊守 積眞證（安来市徳応寺より入寺）往生する。（第六世住職教瑞の妻）
一八七三	明治一四	「本願寺派」を公称する。宗会を開
一八七二	明治一五	王政復古を宣言する。
一八七一	明治一六	明治と改元される。（明治維新）
一八六八	明治一七	廢藩置県により島根県が誕生する。
一八六七	明治一八	学制を頒布する。
一八六六	明治一九	川津小学校が開校する。

一八八六	明治一九	九月九日 坊守 稲妙譽（堅町本誓 寺より入寺）往生する。（第十世住 職照山の妻）						
一八八八	明治二一	一月一日 第十世住職 稲照山往 生する。						
一八九一	明治二十四	四月一日 稲善照往生する。行年一 八歳。（第十世住職照山の二男）						
一九〇二	明治三五	八月一三日 稲開悟往生する。行年 一七歳。（第十世住職照山の三女フ サノ）						
一九〇三	明治三六	一八九四	明治二七	一八九〇	明治三三	一八八八	明治二二	市制及び町村制を公布する。 ラフカディオ・ハーン、松江中学の 英語教師として着任する。
一九〇四	明治三七	一九〇四	明治三六	一八九四	明治二七	一八九〇	明治三三	市制及び町村制を公布する。 ラフカディオ・ハーン、松江中学の 英語教師として着任する。
一九〇八	明治四一	一九〇八	明治三九	一九〇八	明治三九	一九〇八	明治三三	市制及び町村制を公布する。 ラフカディオ・ハーン、松江中学の 英語教師として着任する。
								設する。

				一九〇九
			明治四二	九月二三日 第十一世住職 松井忍 成就任。
		一九一五	大正 四	一月一六日 本堂・庫裏焼失 第十 一世住職 祀忍成往生する。行年七 歳。
	一九一六	大正 五	大正 四	二月一〇日 高野八千代 安来市 徳心寺より入寺。
一九一七	大正 六	一九一七	大正 八	三月二八日 橘知洞、佐田町明教寺 より入寺。高野八千代と結婚。 一一月一五日 第十二世住職 知洞 就任。
一九一九	大正 八	一九一九	大正 八	二月三一日 祀慧日往生する。 行年一歳 (第十二世住職知洞の長 女)

駅開業する。

一九四二	昭和一七	一九三〇	昭和五	一九二九	昭和四	一九二二
金属製仏具すべて軍需用として供出				四月一三三日 本堂再建入仏法要勤修する。		大正一〇
一九四一		一九三一	昭和六	四月一四〇一二五日 親鸞上人六五〇回遠忌法要勤修する。		一九二三
一九四一	昭和一六	一九三七	昭和一二	七月一六日 坊守 祀知道往生する。行年四八歳。(第十二世住職知洞の妻)		大正一二
一九三九		一九三九	昭和一四	一二月二六日 福富ノブヨ、第十二世住職知洞坊守として入寺。		立教開宗七〇〇年記念慶讚法要を執行する。
一九三九		一九三一	昭和六	満州事変が勃発する。		旧制松江高等学校が開校する。
一九三九		一九三七	昭和一二	日華事変が勃発する。		
一九三九		一九三九	昭和一四	川津村を松江市に合併する。		
一九三九		一九三九	昭和一六	太平洋戦争が始まる。		

一九四四	昭和一九	一月一八日 西田誠信（熊本県出身）、高野舒子の婿として入寺、第十三世住職に就任。一一月六日 第十三世住職誠信、徵兵により出征する。
一九四五	昭和二〇	三月二〇日 第十三世住職誠信フイリッピンにおいて戦死、釈誠信往生する。行年二八歳。
一九四七	昭和二一	本堂屋根葺き修繕を行う。
一九四九	昭和二四	蓮如上人四五〇回忌法要を勤修する。
一九五〇	昭和二五	六月 参門修繕と壇改築を行う。
一九五一	昭和二七	九月一七日 宗教法人設立を届出、認証される。（代表役員 第十二世
一九四五	昭和二〇	八月一五日 ポツダム宣言を受諾、終戦となる。
一九四八	昭和二三	蓮如上人四五〇回忌法要を執行する。
一九五〇	昭和二五	朝鮮戦争が始まる。
一九五一	昭和二七	川津公民館が開館する。

住職高野知洞、責任役員 門徒代表

小山良孝、第十二世坊守高野ノブヨ)

七月 高野舒子再婚し寺本姓となる。

一九五五

昭和三〇

五月一日 紫雲丸事故により川津

小学校修学旅行団二十五名が遭難す

る。

一九六一

昭和三六

親鸞聖人七〇〇回大遠忌法要を執行

する。

一九六三

昭和三八

一月 約一〇〇年ぶりの豪雪で宍道

湖が全面凍結する。

一九六四

昭和三九

東海道新幹線が開業する。

一〇月一〇日 第十八回オリンピック東京大会が開催される。

一九六六

昭和四一

八月一九～二〇日 子ども一泊研修

始まる。

一九七〇

昭和四五

三月二七日 高野顯信、彦坂道子(愛

一九七〇

昭和四五

日本万国博覽会を大阪で開催され

知県出身)と挙式、道子坊守として

入寺。

一二月二七日 第十二世住職 秽知

洞往生する。行年八六歳。

一九七一

昭和四六

七月一三日 第十四世住職 顯信就任。

一九七二

昭和四七

一月九日 第十四世住職就任の慶讃法要を勤修する。

二月二七日 第一回門信徒会総会を開催する。

三月一九日 五十回忌以上の法事を合同法要として勤修する。

一九七三

昭和四八

一〇月二七～二八日 門信徒会第一回本山参拝旅行を開始する。

一九七六

昭和五一

四月一〇日 松江組合同宗祖降誕会法要を勤修する。

る。

一九七二

昭和四七

二月三日 第十五回冬季オリンピックが札幌で開催される。

七月一日 宍道湖大橋が開通する。

七月一一日 八〇年ぶりの大水害で、松江市の浸水家屋二万戸におよぶ。

一九七三

昭和四八

親鸞聖人ご誕生・立教開宗七五〇年慶讃法要を執行する。

石油ショックで物価が急上昇する。

一九七七	昭和五一	二月一日 門徒全員に「門徒必携」を配布する。
一九七八	昭和五三	八月 第十四世住職顯信研修のためアメリカを巡拝する。
一九八〇	昭和五四	三月八、九日 光照門主山陰教区ご巡教、同大会において第十四世住職顯信が意見発表を行う。
一九八一	昭和五六	九月三日 松江組連続研修会が開始される。
一九八二	昭和五七	七高僧・聖徳太子絵像を修復する。
一九八三	昭和五八	四月三、五日 門信徒会本山伝灯奉告法要参拝旅行を実施する。
一九八四	昭和五九	二月二八日 川津小学校校舎が現在地に竣工移転する。
一九八五	昭和六〇	即如門主伝灯奉告法要を執行する。異常気象（冷夏）による戦後最大の農作物被害が発生する。
一九八六	昭和六一	くにびき大橋が開通する。
一九八七	昭和六二	第三十七回国民体育大会（くにびき国体）が開催される。
一九八八	昭和六三	本堂余間増築・屋根葺き替え・庫裏改築を行い、一二月二六日落慶法要

一九八四	昭和五九	九月二三日 共同墓地を造成整備する。	九月二三日 共同墓地を造成整備する。
一九八五	昭和六〇	五月 阿弥陀堂昭和修復完成慶讃法要団体参拝旅行に参加する。	五月 阿弥陀堂昭和修復完成慶讃法要団体参拝旅行に参加する。
一九八九	平成元	一〇月一八日 二十四代光真門主、松江組をご巡教される。(有)豊和不動産より開発に伴う寺山林譲渡の申し入れ。	一〇月一八日 二十四代光真門主、松江組をご巡教される。(有)豊和不動産より開発に伴う寺山林譲渡の申し入れ。
一九九〇	平成二	八月 駐車場を造成整備する。	八月 駐車場を造成整備する。
一九九一	平成三		
一九八三	昭和五八	四月九日 松江東高等学校が西川津町宮尾に開校する。	四月九日 松江東高等学校が西川津町宮尾に開校する。
一九八五	昭和六〇	阿弥陀堂昭和修復完成慶讃法要を執行する。	阿弥陀堂昭和修復完成慶讃法要を執行する。
一九八六	昭和六一	三月二八日 第二中学校が西川津町の現在地に竣工移転する。	三月二八日 第二中学校が西川津町の現在地に竣工移転する。
一九八九	昭和六四	一月七日 昭和天皇崩御 平成と改元される。	一月七日 昭和天皇崩御 平成と改元される。
一九九一	(平成元年)	顕如上人四〇〇回忌法要・本願寺寺基京都移転四〇〇年法要を執行す	顕如上人四〇〇回忌法要・本願寺寺基京都移転四〇〇年法要を執行す

一九九三	平成	五	二月一日 参門の新築工事を行う。	一九九三	一九九三
一九九四	平成	六	二月一日 参門新築落慶法要を勤修する。	一九九五	平成
一九九五	平成	七	五月一八日 松江組合同宗祖降誕会法要を勤修する。	一九九六	一九九六
一九九六	平成	八	九月一九日 第十二世坊守 稲慧信往生する。行年九四歳。	一九九七	一九九七
一九九七	平成	九	一一月一五日 寺山林開発許可、(有)豊和不動産に譲渡売却する。	一九九八	一九九八
一九九八	平成	一〇	八月一五日 本堂建立検討委員会を設置する。	一九九九	一九九九
一九九九	平成	一〇	七月一三日 仏教婦人会が再発足する。	二〇〇〇	二〇〇〇
二〇〇〇	平成	一〇	一一月一日 本堂新築起工式を行なう。	二〇〇一	二〇〇一
二〇〇一	平成	一一	一月一七日 阪神・淡路大震災が発生する。	二〇〇二	二〇〇二
二〇〇二	平成	一一	一〇月四三一号线川津バイパスが開通する。	二〇〇三	二〇〇三
二〇〇三	平成	一二			

			一九九八	平成一〇	三月一四日 本堂新築上棟式を執り行う。	一九九八	平成一〇	蓮如上人五〇〇回遠忌法要を執行する。
一〇〇一	平成一二	一月二七、二八日 報恩講にあわせ本堂建立落慶一周年記念法要を勤修する。	一九九九	平成一一	六月五、六日 門信徒会西本願寺へ本堂建立落慶お礼参拝親睦旅行を再開する。	一九九九	平成一一	御影堂の平成大修復が始まる。
一〇〇〇	平成一二	三月一六日 常例法座を開始する。 四月八日 初參式を開始する。 七月九日 文化講演会を開始する。	一九九九	平成一一	六月五、六日 門信徒会西本願寺へ本堂建立落慶お礼参拝親睦旅行を再開する。	一九九九	平成一一	御影堂の平成大修復が始まる。
一〇〇一	平成一三	九月一六日 永代経法要を再開する。	一九九九	平成一一	六月五、六日 門信徒会西本願寺へ本堂建立落慶お礼参拝親睦旅行を再開する。	一九九九	平成一一	御影堂の平成大修復が始まる。
一〇〇〇	平成一二	北海道の有珠山噴火、三宅島の雄岳噴火、東海地方の集中豪雨、鳥取県西部地震などの自然災害が多発し、多くの被害が出る。	一九九九	平成一一	六月五、六日 門信徒会西本願寺へ本堂建立落慶お礼参拝親睦旅行を再開する。	一九九九	平成一一	御影堂の平成大修復が始まる。
一〇〇一	平成一三	山陰道（安来～宍道）が開通する。	一九九九	平成一一	六月五、六日 門信徒会西本願寺へ本堂建立落慶お礼参拝親睦旅行を再開する。	一九九九	平成一一	御影堂の平成大修復が始まる。

		一一〇〇一	平成一四	三月一日 寺誌編集委員会および永代納骨廟建立委員会を設置する。
		一一〇〇二	平成一四	四月二七日 永代納骨廟を建立する。
		一一〇〇三	平成一五	五月一五日 松江組合同宗祖降誕会法要及び永代納骨廟建立法要を勤修する。
		一一〇〇四	平成一四	六月一四日 二十三代光熙門主 往生される。
		一一〇〇五	平成一五	六月一四日 二十三代光熙門主 往生される。
	一一〇〇一			
一一〇〇二				
一一〇〇三				
一一〇〇四				
一一〇〇五				

## 浄土真宗の心得・たしなみ

オ、布施	阿弥陀仏へ報謝として捧げるもの。【御布施】 【御法前】 【御法礼】	【供養料】 【追善料】 【御靈前】	ア、合掌	イ、念珠	ウ、焼香	エ、読経	足のあたるところに置かない。	足のあたるところに置かない。

カ、法事	キ、仏壇	<p>「聞法の行事」ということで、この私と參集した家族・縁者のすべてが、故人を偲び命日をご縁として仏法を聞き、味わう。</p> <p>①阿弥陀仏を安置するところ。</p> <p>②心のよりどころ。ない家庭は早めにお迎えすべきもの。</p> <p>③ご本尊（阿弥陀如来・名号）は本山から。</p> <p>④新しくお迎えしたとき『入仏法要』</p> <p>移動するとき『遷仏法要』</p> <p>⑤線香は折つて寝かせる。</p> <p>⑥位牌は用いない。法名軸<sup>ほなじく</sup>か過去帳<sup>かこちよう</sup>を用いる。</p>	<p>追善供養。功德を積むもの。</p> <p>命日より遅れてはいけない。</p> <p>五十回忌で終わり。</p> <p>死者や先祖、位牌が中心。</p> <p>亡くなつた人がいないのに仏壇を迎えると死者が出る。</p> <p>町版をそのまま掛けている。</p> <p>「お魂入れ」「お性根入れ」「お魂抜き」「お性根抜き」</p> <p>線香を立てる。</p> <p>位牌を仏壇に安置する。</p>
タ、葬儀	(1) 葬儀 葬儀壇	<p>⑦法名は『釋〇〇』の二文字。生前にご門主からいただぐ。佛教徒の証し。</p> <p>〔戒名〕、「信士」「信女」「居士」「大姉」「位」などをつける。</p>	<p>告別式 祭壇</p> <p>一膳めし 守り刀 逆さ屏風 茶碗割り 棺まわし 火葬場への往復の道を変える。</p>
淨め塩 忌中の礼 等			

ケ、お墓	<p>③お悔やみのことば（弔問・弔辞・弔電）</p> <p>「お淨土に還られた〇〇様に、今生のお別れを申します」</p> <p>「心静かにお念仏させていただきます」</p> <p>「今は阿弥陀さまのもとで仏となられ」</p> <p>「私の確かなよりどころとして仰がせていただきます」</p> <p>「謹んでお悔やみ申し上げます」</p>	<p>④七七日（中陰）は、故人を偲び、今生の別れを縁として、仏法を聞かせていただく機会。</p> <p>⑤『院号』は、本山護持に貢献した人への扱いとし本山から贈られるもの。</p>	<p>「灯明や線香を絶やさない」「四十九日が三月にわたるといけない」</p> <p>「院号によつて死後の行き先が変わる」「院号料」</p>	<p>「永眠する」「安らかにお眠りください」</p> <p>「幽冥境を異にする」「冥土」「冥福を祈る」「地下の故人」「草葉の陰」「黄泉の国」</p> <p>「ご靈前」「み霊」「天国に」「昇天」「召される」「神のもとに」「旅立つ」「引導」</p>
<p>②お墓は、「執着せず・粗末にせず」を原則に。墓石の状態と、私の生活への災い（病気やト</p>	<p>「墓相」を見る「分骨は身を裂く」「鬼門は死者を出す」「樹木の日陰になる墓の</p>			

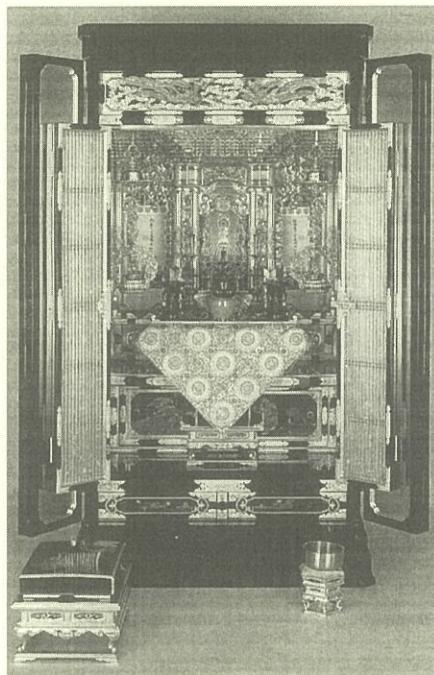
ラブル) の間に因果関係はない。

「墓相」にこだわらない。

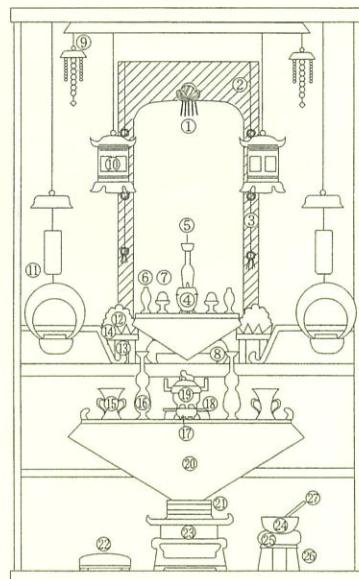
家には病人が出る」「傾くと家運が傾き不幸を招く」「ヒビが入るとケガ人が出る」

コ、その他	③墓石の正面は、『南無阿弥陀仏』か『俱会一処』が望ましい。	○○家之墓 ○○家累代之靈 水子地蔵像	五輪塔 宝塔 靈標 忠魂碑
淨土真宗の法要名 追悼法要 彼岸会 遷仏法要 建碑法要	報恩講 永代經法要	祈願祭 お祭 慰靈祭 施餓鬼	お性根入れ、抜き 開眼法要 水子供養
盂蘭盆会 隆誕会 入仏法要		先祖供養 追善供養	

## 仏壇の莊嚴

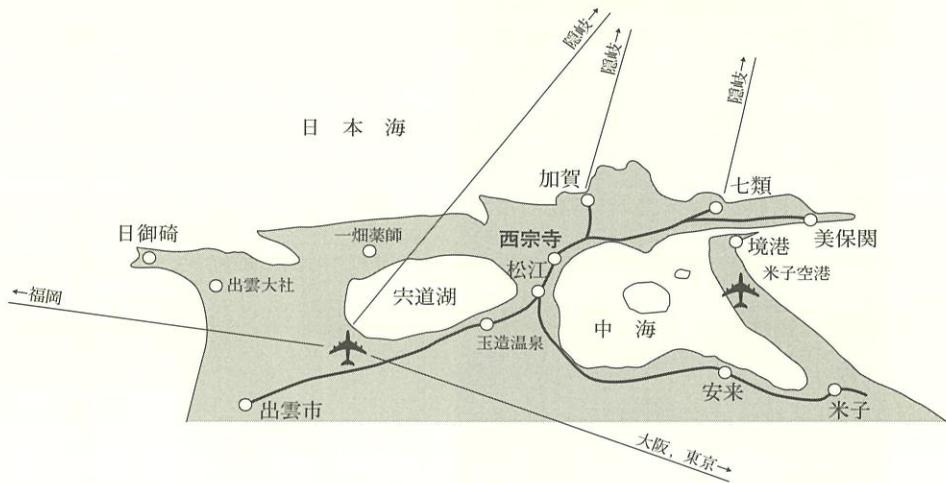


仏壇の莊嚴　浄土真宗本願寺派におけるお莊嚴のもつとも基本的な型。平常の場合と、報恩講・年忌法要などの仏事の場合、または仏壇の構造によって多少違う。



- |         |         |         |         |         |        |        |         |          |       |         |       |        |
|---------|---------|---------|---------|---------|--------|--------|---------|----------|-------|---------|-------|--------|
| (14) 方立 | (13) 供物 | (12) 供物 | (11) 輪燈 | (10) 金燈 | (9) 穫上 | (8) 上わ | (7) 仏飯器 | (5) 炙そく立 | (4) 火 | (3) 揚あげ | (2) 戸 | (1) 華け |
| 対       | 対       | 一對      | 一對      | 一對      | 一對     | 一對     | 一對      | 一對       | 一對    | 一對      | 一對    | 一對     |
| 立       | 筈       | 対       | 灯       | 籠       | 珞      | 卓      | 卓       | 舍        | 卷     | 帳       | 帳     | 鬱      |
- 四具足
- 
- |         |          |            |        |         |         |           |         |           |               |         |         |         |          |            |         |
|---------|----------|------------|--------|---------|---------|-----------|---------|-----------|---------------|---------|---------|---------|----------|------------|---------|
| (27) 榆台 | (26) りん台 | (25) りんぶとん | (24) 鈴 | (23) 和讃 | (22) 御文 | (御文章・抨讀用) | (法語集など) | (土真宗聖典など) | (21) 正信偈、和讃、淨 | (20) 打敷 | (19) 金香 | (18) 香炉 | (17) 土香炉 | (16) 炙そく立て | (15) 花瓶 |
| (うちぼう)  |          |            | りん     | (小型の鑑)  | 文章      | （御文章・抨讀用） | 法語集など   | 土真宗聖典など   | 正信偈、和讃、淨      | 打敷      | 金香      | 香炉      | 土香炉      | 炙そく立て      | 花瓶      |
|         |          |            |        |         |         |           |         |           |               |         |         |         |          | 五具足        |         |

## 西宗寺への案内図



参考文献

島根県歴史人物事典

島根県の地名（日本歴史地名大系33）

島根県歴史大年表

島根県大百科事典上・下

島根県史 八

松江市誌

川津郷土誌

朝酌郷土誌

雲陽誌

出雲国島根郡寺院明細帳

山陰古墳文化の研究

古代出雲を歩く

出雲尼子一族

続尼子時代史探訪

編集委員会名簿

一、編集委員

○委員長 小山 昭  
○委員 加納 康雄 野津 節郎 田邊 俊夫 野津 達夫 久保田稔子 川橋留美子

野津 時雄 野津 晴美 井上 修身 野山ナツコ 加納マサ子

内藤 静夫 野津耕一郎 野津耕一郎

○指導助言

松江郷土館学芸顧問 安部 登

二、執筆者

小山 昭 加納 公夫 野津 節郎 田邊 俊夫  
加納 康雄 住職 坊守



## 編集後記

「寺誌」の編纂については、新しく完成した本堂建立以前から、門信徒の役員の間で話題になつていきました。

平成十三年一月、編集委員会を立ち上げ、資料の収集に着手しました。本文に示すように、大正四年の火災によつて寺が焼失したこと也有つて、思うように資料が収集できにくく、難航しました。

しかし住職をはじめ、編集委員の皆様のご努力が実り、四百有余年の歴史を誇る西宗寺の歩みが、このような素晴らしい寺誌として発刊の運びとなりました。

編集委員の皆様はもとより、ご指導頂きました安部先生、そして資料をご提供頂きました各寺院・有縁の皆様に、心から感謝と敬意を表します。

今後はこの寺誌が末永く、門信徒の心の中に深く刻まれ、聞法の道場である西宗寺の繁栄に役立つことを信じて止みません。

西宗寺誌編集委員会

委員長 小山 昭



西宗寺誌

平成十六年八月一日発行

発行 西宗寺誌編集委員会

松江市上東川津町八四五

印刷 株式会社 報光社  
平田市平田町九九三